



嵐雪句集

下



今歸の集林と部

初秋

秋風のふりこも地潤すしれ
はまより木は糸をひくもや秋の
海外乃世堂いづ門の糸の糸

閑居

禱の力をさほる糸細りし林の糸

葛

下

嵩の何れにありて高の葉はうら

宗紙の廟

石塔とありては体は二葉う那

市中

盆とて杖とて門乃竹箆う那

七夕

さ萩もややうかやうこの川

柳合たあ妹うせん待たや

係一倉和簪やもねひの糸うん

大伽藍造管ありてはあ

しら白きくやうはあはあ

葉皮招の肩よ交うと山い

あもあうううそのああ

ちうくあへとああ

上野うらなやあううう

能花のけううううう

名月の影をいふあはれは
セリを階と思ふうらむ世に
セリや如く夜に月を牛車

防鴨河使

書越や人目けみの河は
流のまよふうらむ世に
流やいもたしと秋の糸の川
あはれえや隅田川糸の楊桂

おもあはれをいふを
飛鳥井あんとよの
村の立むらむと此田
あはれをいふと
あはれをいふと

秋の月をいふと
尊
あはれをいふと

磯家申の梅...
品二(二里七付)...

おし...
一...
...
...

潜 洗
...
...

虫
...

乃...
...

何...
...

茶碗銘

黒茶碗あり花の影をうつし
く後を實にうつし
持つて身もやをうつし
鼻をうつし
光るるの光り

檢校 貧僧 大黒 小く後

えらみ子 甲あひ 小あを花

三代目をたぐひつゝ
くもたぐひつゝ
あはく後

松山 ありん

庶舎も香あり
也獄をうつし
此處の温化蝶情の類
きるるつゝ

おのぼり御免をいふまじくす

お歌

さきの葉を捲くわづらひよあはれ

十歳とぬるる童の才はうた

駒丸りのもとのまゝも来乃あ

うすい権限とく

いまのまにきりかゝる神子の目

鶺鴒

まぶさなれおあひや葉鶺鴒
味留とく者し喰ふとあひ鶺鴒
鶺鴒を空のたきさし鶺鴒の卵

西氏

おひつとともあつるあはれ

書掉

尸の如拮据かゝるやおとあへ
蓮の葉あはれをよ女の戸外

朝更よそあふ

蓮の愛れ花をとりて

同一周忌

さくばいしつて

里右うぬりし

鬼打りのさき

盆會

魂柄をうぬも

魂赤母屋の妻戸の音ハ何

倉も結も皆おくさ

く戸柄や皆らぬくと

詞あり略

き梅あり家、

九日の六日ま

の冥途におよ

は巾の身柄あ

大みまの白をたぬるを
雪のう後のおらるる

山の雪を雪のもたぬるや大みま

お撲

角力とくち並のや花のかけ綿

ふかきと南よりのけしき

鳴る系のおもきもや 藍白

庭のうもたぬるはの^{モス}のま

蘭袍同肆

盗るる葉やと食乃養の下

秋言

立ちゆく後赤や秋のうれ

もかきく昔面くらす秋の言

新く起く又赤く足ても秋の言

花の言石山も乃 澄きも

定家

舟^{アゲ}多ると海窟の杖乃タク卯

草折言上人の岩室

燕乃カツラうらありかづの句

江く鳴

目をとおむ海士のぬるく也初め

江の島の穴さうきあや杖の多

露の園の好む今もあま

結る島の舟にけし音のたれ

やうりうたり秋葉の笛子

秋風くくれぬ鳴きハ秋葉

の木のうらむきくくも楽人

るむれく博くあり社傳

あまの似くきりもき出る神の

くゆさの崖をたかき階下

あまのつまむねの氣もあまを

くくあま

鳥帽子のさくら白雲と皆山田の

月

名りや柳の枝をさくら吹く
名りや烟遠ゆく水のく

松白

銭矢立やうしやう之丑とよあまを
は合を岬の松の卯うよの月
おたやよ松をさ書さううよの月

五折新巻ささ戸かをを和

くさる坂の松を積をする一客

名有りは蜂もおのほね梢の卯

ゆりや先んを血染りてさるまを巽

海も山を村色かさるさくおの存

清涼茶表の何うたをつく

つとがしきらる中か

新巻や肉は取乃株の卓

下

上

名身や秋人の髪の名きうごよ
まの髪キヤツの吐とるつこまの身
名身此園友城を男うけ
ま真子髪うらあはは子の身
いこのの髪かまうのうつ
松江の髪替わらば
俎板をありきま
珍物ちうた江のひきま

名身なみの髪かみとよまの髪かみ
まの髪かみの髪かみ
あはれ

秋あきの髪かみとよまの髪かみ
名身なみの髪かみの髪かみ
初はつの髪かみ

早はやの髪かみの髪かみ
鎌倉大佛

的有身と南をどけきり佛頂珠
名有身や海一ふ悔る露の夢
る笑い有身る人のんさげり
くも長崎の泥足免つり
顔もして月あはれぬるハ物を
おろかり侍るなり

新身の心をえきり夜燈の筒
明身や乃公の若のおまへるき

就年といかよるまぬ有身なり

初まらる歌

踊ふ有身る年の思さを秋の身
とこかーと有身の小貝、磯の身
信濃僧る衆

君身は福にせん信濃の土をば
初まらる歌

新酒

赤もどく新馬を人の醒もまた

頭もどく

とせ初や一水村山廓酒詠は
何一の物やおちと唱ふを海も
本聲の壺を醒まると香がしる
ハ九月何れもいつこの切ると貝
焼くもく世の中一田も疇を
舟もも船をいりりな山里を

柿栗

いとう様ちり柿くく龍ハ詠

詞もどく

於石もちり柿をぬる舟の如
秘栗やゆよさける法の場合
秋のくれ井も柿力かきとん舟竹
とくめく土産柿くれり
人丸の柿の安山の色の栗乃

かゞりあつたもの、あまりあり
と、矢真一、あ

極のわきり、形、山の木、穴、穴、穴、穴

標菊

村、回子、煮、焼、す、る、目、を、た、た、ぬ、の、光
くち、す、ら、な、お、所、か、た、ね、を、板、葺

サ菊

初菊、や、か、ら、の、頬、の、お、き、か、り

指、ま、る、ゆ、も、や、き、し、ら、の、茶
茶、浪、子、の、も、こ、た、え、り、あ、茶、の、岸
一、く、ち、福、り、ら、の、も、こ、も、こ、も、菊、の、あ

菊九章

其一九日

茶、ま、る、ご、つ、あ、く、つ、茶、の、九、日、か

其二 素堂亭、あ、い、く、茶

か、く、い、茶、や、あ、茶、の、中、の、ま、る、茶

其三百菊を、拵、け、ら、に

新よりそをのしとるぬま〜地登
おのの兼杖、ちきしとむさか〜毛
縞のふき子とけい、餘〜胡蝶水
城とさ〜杖と福とや、糸の母
漸下圓指〜遊ス

き〜れ番子とけい、山脈の雪踏水
山脈あるあちや、糸の板きりけ
〜くはあやま〜いさ糸子、鱈の魚

きしと〜と〜しきの拍子のあちのう舞
糸田糸のけい、み〜り〜り、蚊足

じや〜〜〜と〜りまあ〜い〜や

むす〜れ大と〜り〜とま〜つ〜と〜り

初あ〜と〜町

袖つ〜に〜もつ〜れ〜と〜や〜あ〜の〜白
ま〜の〜の〜里と〜を〜翻す〜と〜ら〜れ

瓶林の糸

牛ま〜れな〜糸を〜をか〜ら〜た〜ら〜り

莊子標本の太きい斗をかくす
糸糸の碎せ光をいかにい
化せしんんと放散逍遙の多
むれしやあり

ちりりも二夜の徳や板お糸
ちりりもいまこい

昔の葉やはこの力おうらむ時
病床の虱をとる辨

あゝの力おらむのちりり
襟の揺うきこといほが飯
ほぶのまゝもあつさりい
きり疾くまは上よ赦し
と水ちめう縁二重おきして渠が
戸をと窓のいふた白き肉
黒き腸呼吸しはせし動揺
いり眼をうくといふも足

いと拙まれば真蝶の中へ
質を請く禪子潜りぬの
兒小かきねく人た血氣を
犯し吸ふと蚊子の鐵牛
を嚙むよと於ましき世
涯の流るる所を火とりた
中よ油さしつくと花い木
枕の角のあつてをいへる

さしぬさき及真如の性乃
こころも事や摩竭あよとら
とる魚乃大百由旬よりセウ鯨
鰓の微細あるまて行きて
憎悪かき事れとある
えかしの内裏のまに祈け
心ごとく所知の光よ一夜
あつて拾ふしきるに物の化れ

うし治りりささる知識の肌
下馴まらしく徳をおれ
ししししししししししし
因縁もや挂乃穴おせをたぐ
久々の同年の悲人アタの報小
しと出もつれさけいふふいし
とんとかぶるじのくち鎌さり
志らくとさしちたわふる年

出後くともさるましく入は
こいもししつるは騒くちま
くちおはしれし濁り物さ
せし人の籠りし手打も足
よる色号をも志ししに志し見東
雲の空をも志しみまぬ白所
杖の衣被りしむれ
ふんむのともやう只成はくしり

くきと集るる部

瀆大黒

神の爲に能く女房とさる部

十月懸

まゝとくは嵐の集るる部

風

本朝の権の稀乃多後部

お川亭より

足感も起る藤の秋傳を切角丸

炉

炉の如く日を忘る世の如く古き

法華を写す

沉着世樂無有慧心

けし免とて扱ものいふ火爐

その日おさてもし

思見よや我のいふと莖の梅

ふみくよ川人の有赤大根

午とらふ一子記

萱原や拈ゆけり馬の陰囊

水鳥

鈴鴨の身少り後る存を

茶の何を答やういけぬか

汗水

鴨おしるふまゝし歩む水鳥

下

ナ

歌夷傳

鶴^{イホ}付をといく^{イホ}殿^{イホ}千^{イホ}成^{イホ}る^{イホ}か^{イホ}れ
あお船の流やつ^{イホ}出^{イホ}生^{イホ}美^{イホ}味^{イホ}愛^{イホ}

十月廿五日共桃隣出茂江而暨

義仲奇望芭蕉翁之墓歎唱

上略

あお舟^{イホ}七日の^{イホ}中^{イホ}つ^{イホ}く^{イホ}よ^{イホ}の^{イホ}船^{イホ}下^{イホ}

美^{イホ}仲^{イホ}も^{イホ}の^{イホ}家^{イホ}上^{イホ}よ^{イホ}い^{イホ}ま^{イホ}ら^{イホ}く^{イホ}空^{イホ}華^{イホ}

蘇^{イホ}一^{イホ}水^{イホ}舟^{イホ}う^{イホ}ら^{イホ}三^{イホ}層^{イホ}守^{イホ}時^{イホ}心^{イホ}鏡^{イホ}

一^{イホ}巻^{イホ}を^{イホ}い^{イホ}ふ^{イホ}れ^{イホ}も^{イホ}万^{イホ}象^{イホ}よ^{イホ}く^{イホ}う^{イホ}時^{イホ}

け^{イホ}師^{イホ}こ^{イホ}の^{イホ}た^{イホ}よ^{イホ}あ^{イホ}か^{イホ}く^{イホ}う^{イホ}う^{イホ}を^{イホ}

利^{イホ}一^{イホ}他^{イホ}を^{イホ}利^{イホ}し^{イホ}く^{イホ}後^{イホ}に^{イホ}其^{イホ}利^{イホ}

不^{イホ}竭^{イホ}今^{イホ}も^{イホ}も^{イホ}た^{イホ}る^{イホ}も^{イホ}も^{イホ}ち^{イホ}法^{イホ}法^{イホ}

け^{イホ}下^{イホ}あ^{イホ}か^{イホ}孫^{イホ}の^{イホ}い^{イホ}ん^{イホ}ち^{イホ}あ^{イホ}か^{イホ}け^{イホ}

十月廿二日夜

十^{イホ}月^{イホ}廿^{イホ}二^{イホ}日^{イホ}夜^{イホ}は^{イホ}く^{イホ}も^{イホ}あ^{イホ}ら^{イホ}く^{イホ}と^{イホ}か^{イホ}

四七日題符三物

本かりの指も別保り養と望

十一月十二日初拜忌

泣中よ多き象じり耐コタ入り

元禄乙亥十月十二日一周忌

吾人の裾を脱ぎし彼是れ

七回忌

お祭と西遊れも出りや坐興菴

十三回

も花のめさう獄よりわすれ

南門のからとてし知りなく先

しりれ

か花の存もこほはるし

菓子のおやそも世をわらわ

は菴のよみ元せらやさるう

花のしと知るる音の光り

今の海田よりぬりもえす

東遊つひとてふはま
 けさの餅も赤もやまの音
 おまをばほれ笑ひしやうの音
 と一疾輾然と一曰乃氣
 又けおさすくし字世まあひと
 やせび菴の芭蕉といふ
 くら〜〜かりきる秋桐の葉
 の一葉〜〜昔〜〜給ふ

暮菱うもく〜員發白〜の音
 猿猴のてまをわやののれ

辭世

東中る吐一葉中る地の中

昔寛延三庚午正月 百萬音原 校訂

京堀川錦止町

西村市即右衛門

江戸本町三丁目

西村源六棹行

